
人外王国建国記 ~ a Monster Kingdom ~

右肘に違和感

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人外王国建国記 ｝ a Monster Kingdom ｝

【Nコード】

N9046X

【作者名】

右肘に違和感

【あらすじ】

まだ高校に入って半年を過ぎた程度の高校生、佐島高明は身内の店で働いているアルバイトの帰り際、突然謎の現象に巻き込まれ

目覚めた時には、慣れ親し　親しんではないのだが
コンクリートジャングルから放り出され、理解が出来ぬ環境に居た。

この作品は方向性の都合上、厨二成分がほぼ除外されており
その関係上主人公がよわつちい上に結構ご都合主義です。

苦勞させまくるつもりですが。
そういったものが苦手な方は、
ご閲覧をお控えくださいますようお願い致します。

プロローグ ワールドネバーエンド（前書き）

このプロローグを投稿したのは23：56という謎な時間ではありませんが

10/24の本日より、小説家になろう様の一部をお借りして書き上げた文章を載せて行きたいと思います。

処女作故、見づらい文章、表現がおかしい文章

拙い文章色々あるかと思いますが、生暖かい目でゴミのように見てやってください。

プロローグ ワールドネバーエンド

「それじゃあ、お先に失礼します。」

「はい、お疲れさま。明日も頼むね。」

「はい、んではー」

ボタン。

返しの言葉の終わりと共に、店の裏口の扉を閉める。

「ふー、今日も終わったなあ」

つぶやきと共に、自分の自転車に掛けてあった鍵の番号を合わせる。最近寒くなってきた手前アルバイトの終わる月の出現時間では、鍵の金属の冷たさが指に来る。

4

そんな冷たさに秋の終わりを感ずる10月の末。

今日も彼、佐島高明 - さじまたかあき - は近所にある親族のコンビニのアルバイトを終わらせ

自分の家に帰るために、鍵を解いた自転車に跨る。

「えうあああ、サドルも冷てエー」

『あの部分』がキュツとすばまってしまふような独特の冷たさを感じながら高明は自転車を走らせた。

(しかし…そろそろテストか)

コンビニのアルバイトに、つい先日16歳になったばかりながら、身内枠として、手伝いのに今まで色々やらせてもらっている高明。当然自分の時間はそこで潰されてしまう。しかし自分の時間も取りたい。

となるとどうなるか？

当然の如く、夜更かし 授業中に爆睡のデスコンボである。

故に、彼の懐は高校生としてはとても優秀だが成績のほうは駄目な方向でとても優秀だった。

具体的な数字で表すなら、10段階評価で平均3.7程度である。ちなみに体育だけは7と他より高いが、その上で3.7である授業中、寝こけているために授業態度はほぼ全員の教師から覚えが悪い。

このため、成績の大部分を占めるテストは彼にとって死活問題と変わりなくなる。

ここで手を抜くと、高校1年にもかかわらずそのまま留年が確定しそうな勢いがあるのだ。

(そろそろ雑学調べも控えて、勉強に動かないとヤバいか・・・)

彼の趣味はパソコンからネットに繋ぎ、情報として転がっている

色々な雑学を見ていくネットサーフィンである。

ネット世界には情報が際限無い位転がっているため

彼の満足を満たすための時間はいくらあっても足りる事は無い。

最初こそじっくりと内容を吟味しながら楽しんでいたが

ひとつの記事に対してその日1日の自由時間を潰してしまったあたりから

見方を考え直し、ザラッと内容に目を通すに留めている。

(なんの役にも立たない知識はつかだけど、新しいのを知る喜びは格別なんだよな)

この意識を何故学校の勉強に活かせないのかは

おそらく全国高校生諸君全員にとって共通の命題であるだろう。

「ともあれ何の教科から手え出すかなー」

毎度毎度授業中は寝ているので、試験範囲すらクラスメイトに聞かないとわからない。

今回も範囲の割り出しからして苦労しそうだな、と考えて

メギッ。

「ん？」

ふと、奇妙な音がした。

後ろに振り返るも、異常事態に陥った物質は見当たらない。
石が蹴飛ばされた音でもない、鉄が曲がった音でもない。
車が破損するような事故も、物騒ながら誰かが刺されたり骨折した
音でもない。

周りのモノを見る限りは、特に異常は

(え？周り？まわり　　！？)

気づいた。気づいてしまった。

おそらくこれが音の原因であろうかと。

周りの景色が、『おかしい』。

「あ………！？」

景色が、微弱に『歪んでいる』。

まるで、その風景が当然のように全体に揺らぎが掛かる。

「　　！！」

揺らぎを感じた時点で「これはまずい」と思ったのか

高明は自転車のサドルいっぱい、踏み抜き加速をかけようと

「うぬああー!?」

ジョルッ

タイヤが地面についている抵抗感が無いまま

サドルが勢い良く空回りした。
慣性の法則で思わず前につんのめり

メキヤアツ

『周りから』、絶望的な音がした。
どう表現したらいいかわからないが、とにかくそんな音。

「ちよ、ちよっと

俺の、俺のテスト勉強が！！べんきよ

」

この期に及んでテスト勉強などに気を向けられるこの精神は
褒めるべきなのか、貶すべきなのか。

高明は意識が薄れる自覚すらないまま、静かに堕ちていく。

(ただの 夢、だ……。きつと、起きたら、起きた、ら……)

こうして、一人の青年が西暦201X年の地球から全く関係の無い
場所へ旅立った。

その原因は、神のいたずらか、不可思議なオカルトか、運命の成せ
る業か

曰くつきの能力も、チートと表現されるような反則的能力も何一つ
持ちえず

一般人代表、町の人Aさん程度の能力でしかない彼の突然違う『どこか』に迷い込んでしまった、佐島高明の

彼が全てにおいて苦労していく、異世界探訪記がここから始まる。

プロローグ ワールドネバーエンド（後書き）

これから宜しくお願い致します。

第1話 ここは一体どこですか。そんな事は俺も知らん

フツと、高明は目を覚ました。

うつすらと目を開き、空が青空なのを確認する。
自分が起きる直前の記憶が夜であったために
長い時間眠ってしまったのだろうかと思いつつ、目をパチクリさせる。

その目は突き抜けるような青空を目の当たりにし
その視界の隅で森の木々がさわさわと揺らいでいた。

(ああ…空気がとてもうまい)

「… って、森の木々……？」

ガバアツと身を起き上がらせ、自分の置かれている状況を慌てて再認識。

目を覚ます前、自分が居た場所が完全なる日本のコンクリートジャングル。

それ故に、今の状況がどう考えてもおかしい事だとハッキリわかる。

「な…何だこれ、一体何がどうなってんだこれは…」

思考を巡らし、可能性の一巡を試みてみた。
まず場所の移動について。

ここは日本であるだろうが、見渡す限り完全に大森林。
周りを見る限り舗装されている道もなく、若干ケモノ道らしき物が

見える。

つまりは、何か要因があつて、または作られて
自分の意識が途切れた場所から移動している。

その可能性は一体なんだ？

「誘拐、か？…いや、それは明らかに薄いな…」

そう、周りは大森林。自分以外に人が居ない。

もし、何かしらの理由で誘拐されたのなら見張り位は居るはずだし
何よりも屋外に放置して寝ている事がまずおかしい。

「じゃあイタズラでここまで引きずってこられたのか？

でもその割にはズボンも全然汚れてないよな…」

自分の周りには引きずった後も確認されず

かといって自分の服のどこかが土がついて汚れているわけでもない。

この事から高明は、まず第一に考えられる

『誰かが自分をここに動かした』という仮説を完全に否定した。

「なら他の可能性は？…他に何がある…？」

改めて考えてみるも、適切な考えは何も思い浮かばない。

それこそ自分が知らない間にワープでもしてしまったというオカル

トぐらいしか

他に思い浮かばない事に、自分の考えの器の狭さを感じてしまいうことになる。

ついでに述べると彼はネットサーフィンこそ趣味ではあるもののテレビゲームやネットゲーム、漫画やアニメなどにはほぼ手を出していなかったために
異世界召喚や異世界への来訪という発想には至らないようだ。

「…はー、まあどうすんだこれ、どうすんのよ…」

問いかけてみるも周りには人は居ない。返答は当然返って

「 キャウ？」

「 へ？」

なんと返答はあった。あるにはあった。のだが
返された声が言葉にもなっていない上に、声を発したモノが問題だった。

体格はおそらく90cm程度。

パツと見たら人「つぽい」のは間違いない。

これの深刻な問題は

純粹に、絶対に人ではない事。

まず頭部がとても犬っぽい。

頭部が子供程度の大きさだからなのかもだがシベリアンハスキーほど鋭い感じでもないが秋田犬よりは確実に威圧があるような形状の頭部。

さらには首から下、手の先足の先までが完全に茶色の毛で覆われており、尻尾まで生えている。

おまけに目元はくりつとした瞳。動物好きであれば愛嬌を感じざるを得ない。

基本的に自分の娯楽の性質故に、今の時代の日本の若者とは若干ずれている高明だが

多少なりとも現代日本の青年らしく、ゲームに関しても知人がやっていたものや

自分自身が知人から借りて、やっていたゲームもあるにはある。

目の前のちっこい生き物がしている格好は、高明がやっていたゲームの

序盤に出てくる雑魚モンスター、「コボルト」にしか見えなかった。

ついでに述べるなら、高明は動物は大好きだった。

気持ち悪いとは思わない。むしろこれは抱きしめたい部類に入る。しかし高明はその行動に移る事が出来ない。

何より、理解しがたいモノであるという恐怖心があるにはあるが

不細工に踊っているかの如く交わし続ける高明。
そんな攻防を2分程度ずっと続ける1人と1匹。

「グウ、フツ、グルルルル…!!」

「はっ、はあっ、ちょ、ホント…ちょ、待って…」

ここまで一方的に攻撃されながら、未だに反撃せず
なんとか平和に解決出来ないかと一抹の望みを頭に浮かべ続ける。
高明も立派に現代日本の平和ボケした世の中に、影響を受けている。
そもそも言葉自体伝わっているかどうかも怪しいのに待ったを掛け
ようとする様は
別の意味で好感が持てなくもない。

「な、なあっ…なん、なんでそんなに、気合入れて襲って来るんだ
よ…!!」

「グルルルルウ…!!」

やはり言葉は通じていないようである。

しかし必死な様子もあってか、コボルトは高明が攻撃に転じないの
を見た上で

さらに追撃を掛けようとする動きを見せる気配はない。

「ハア、ハアツ……」

そのわずかであるかもしれない間を使い、高明は目だけで周りの状
況を

出来るだけ多く確認しようと頑張ってみた。

まず周りは、自分の現在地自体が完全に森であり、逃げ回った場合完全に迷い込み、それこそ同じコボルトに徒党を組まれてやられる可能性がある。

まず迷い込んだ時点で人間の身としては、備えすらないこの状況
人生の終わりを意味するのと同じなのは、さすがに森の中での知識
がなくともわかる。

ならばどうするか、やはり目の前の「敵」を倒してひとまず落ち着くしかないのか…

何故襲ってくるのかすらわからないこのコボルトは、高明を見て

「……………」

高明を見ていた。

表情こそ怒り顔っぽい事以外わからないが、雰囲気がおかしい

高明はそう考えた。

なんと言えればよいものか…………あの目は考えるからして

(怒って…? いや、なんか怯えてる感じだぞ)

そのコボルトが高明に送る眼差しは、明らかに怒りによるものではない。

どちらかといえば「初めて見た生物」に遭遇した恐れに完全に支配されている、と感ずることが出来た。

尻尾もかなり丸まっている。

高明の立場からしてもそれは同じではあるのだが

最初の時点でわけのわからないことになっていたがためにいきなり鉢合わせたにしてはギャップの差が広すぎたわけでもないために

そこそこ冷静にモノを考える事が出来ていたのだ。

しかしこのコボルト側からすれば、日常のように周りを歩いていたら変なものを発見して、視線が合った。

ケモノという常識でコボルトが動いているのなら、そこに恐怖を感じないわけではない。

「ウウウウウ…!」

(……んー、怒ってるわけじゃないんだったら)

なんとかなるのではないかと考えてしまう高明。

本気の怒りを持って敵対された場合であるなら、やはりほとんどの場合は

お互いが倒れるまで、戦いというものは続いてしまう。

しかし今回に限るなら、コボルトが感じている感情は恐怖。

その恐怖さえ取り除くことが出来るなら、命尽きるまで襲ってくる可能性はかなり低い。

(でもどうやって怖くないって示せばいい…!? 下手に動いちゃえば返って刺激しちゃう)

そう、本能で生きている生物は基本的に相手の動きにはとても敏感なのである。
人間の咳ひとつ取っても、ある動物ならこれを威嚇行動として捉える種も存在する。

（でも…敵として倒すって選択肢だけは絶対に却下だ。だって）

「　　こんな可愛い物体、怪我させれるわけないだろ」
「ガウツ?!」

眩きが口に出してしまったせい、コボルトが反応してしまった。
高明のこんな小さな、動きと言えない動きで反応しているあたりやはりこのコボルトの占めている感情が恐怖なのは正解のようであった。

（餌付け出来る食べ物なんてない。
興味を引くオモチャもない。
言葉が通じるわけでもなさそうだし…
だったら逃げる以外で取れる手段は）

「　　直接体をなでるぐらいしかないな!」
「ウウウウウギャウン!」

コボルトが高明の動きに過剰に警戒し、再び攻撃を開始する。

しかし

その攻撃は一撃目で停止した。何故なら

ゴツンッ

「おぐあぁっ……!!」

「クンッ!？」

高明は自分から棍棒の射程内に入り、腕で防御を固めながらとはいえ自分から棍棒に当たりに行ったからだ。

もし高明が武芸一般に秀でている、もしくはその登竜門あたりに入った程度でも経験していればこのコボルトの一撃は無理に当たること無く、近寄る事が出来ただろう。

しかしそんなものを習った事も無い高明にそれを求めるのは酷な話である。

体技がほとんど無い高明では、交わしながら近づくななどということ発想すら思いつかない。無理やり当たりに行つて、動きを一瞬止めるという発想ぐらいしか実現可能な案がなかったのである。

最初のやり取りと同じく攻撃を交わす方向に動くとはかり考えていたコボルトは

高明の望んだ案の通り、体が硬直してしまった。
突然の目の前の風変わりに、それでなくても慣れていないこの状況
において

動くという事を完全に止めてしまったのだ。

そして、内容こそ不恰好極まる状態ながらも目的を達成した高明は、

「だああアアアーーーーッッッ!!」

「キヤイイイイイイン!?」

コボルトの体を、無理やり腕と体を押し付けて抱きしめる。

そして当のコボルト自身も、突然の抱擁に加え高明が叫びながら突
っ込んできたため

もはや完全なるパニックに陥る。

「キャンッ!! キヤインッ!? キヤウーーン!!」

「うああっ! ちょ、暴れるな… 暴れないでお願い!! 腕も痛いんだ
ってッ!!」

先程より上げていた唸り声から若干声が高くなり

聞き方によつてはなにやら恍惚としてしまいそうな声を上げるコボ
ルト。

しかしコボルト本人からすればこれは立派に悲鳴である。合掌。

同時に限界まで手足をばたばた、頭をぶんぶん振りかぶる。

イヤイヤ!と駄々をこねているワンコに見えないことも無い。

しかしその体軀は100cm前後。下手な子犬とは地力が違う。腕を痛めている高明にはこれまた手の余る反撃となって、コボルトは暴れまくる。

「い…ぎっ、く、そっ…！」

「ッこれで、どうだぁ！」

「キヤフウツ!?!」

もがくコボルトを腕の中に抱えつつ、決して押さえつけられないという条件の下
高明はようやくと、自分とコボルトの身を、望む形に作り上げられた。

それは胸元抱つこに近い形。よくご近所の奥様方が小型犬を抱えつつ井戸端会議に参加するあの形にとても近い。残念な事に相手の体軀は人間の子供ほどあるが。

「キユウウウウツ……!、ウワン…！」

ガブツ!!

「あだあああああ!?!」

そしてそれでも観念せず、コボルトは口を大きく開き高明の肩に噛み付いた。

コボルトは力の限り噛み付いたのだが、元居た高明の地元は最近冷え始めていたのも繋がり、厚手の上着を着ていたため、酷い一撃になることはなかった。

それでも犬歯が若干皮膚を突く程度に、その牙は貫通する。

「いづづづ……でも……」

（ようやく、捉えたぜ！！）
「キャフツ!？」

圧迫される肩の痛みを我慢しつつ、高明は最初に考えていた案を実行し始める。

それは、頭なでなでだ。

そっと、手を頭頂部から即頭部、首筋のほうに至る形で、ゆっくりと丁寧に流れるように毛皮を撫で始めた。

「よーしよしよし……いい子だ、いい子だー」
「……………」

ゆっくりゆっくり撫でていくと、コボルトの反応も未だ驚愕はあるものの、肩に噛み付いた力に関してはそれ以上強まる事もなく、むしろ緩くなってきている。

（やった……！！本当にうまく行くかすっげー不安だったけどこれはちゃんと効果が出て……！！）

肩のほうに完全に圧迫感がなくなった後も、丁寧に力を入れず、緩

やかに撫で続ける。

ついでに喉のほうもくすぐるように撫でてしまおうか、と思った高明だったが

下手に動いてさらに緊張された先程を思い出し、その考えは一旦見送る。

そのうちやるつもりのようなのだが。

「よしよし……落ち着いてきたか」

「キユウン……」

声を掛けながら撫でていると、コボルトからも返答があった
どうやらそこそこ気持ち良いらしい。

そしてさらに2分程などでを繰り返す。

「ふうー……もうさすがに大丈夫だろ」

「……！」

拘束が一旦解け、コボルトは我に帰ったように高明から素早く距離を取る。

しかし先程よりはきちんと高明の感情を理解したのか、取った距離は2m程と若干短い。

「あゝあゝあゝ疲れたあゝ……」

「こんなに必死に動いたのいつ以来だよ……」

警戒心もなしに、コボルトに背を向け、そこら辺の木の根元に腰を下ろし

脱力するかのようには高明はあぐらを掻いて木によしかかった。

「はーあ、どっこいしょのしょ、っと」

「クウウ……？」

コボルトはコボルトで、高明の言葉が当然理解出来ず

何を言っているかこそ判別してないが行動に敵意がない事は

やはり先程のなでなでから確認出来たらしく、攻撃行動には転じな
かった。

「ほれ、お前もよかつたらこっちおいで」

「……クン。」

手のひらをおいでおいでとフリフリさせてみたところ

警戒心こそ丸出しではあるが、そろりそろりと近づいてきた。

そして視線を互いに確認しあった後に

「 よっ、と」

「っ！！」

高明はそっと両腕でコボルトの脇を掴み、こちら側へ引き寄せる。

突然の高明の行動に若干身を硬くしたコボルトだったが

どうやら攻撃行動ではないと判断したようで、

コボルトはそのまますがままされるがままである。

そして高明はコボルトを自分のあぐらを掻いた足の隙間にポストと
置き

軽く抱きしめながら、再び頭を撫で始める。

「よしよし、俺はお前の敵じゃないからな」
「クウン…キウンッ」

先程撫でもらった頭の気持ちよさを思い出したのか
今度はそのままおとなしく撫でられるコボルト。

高明のほつも役得と思いつながら、やはり体をすっかり洗う文化が無いのか

若干匂いがする事に気づき始めたが、それでも丁寧に撫で続けた。
そうしてそのまま撫で続ける事しばし。時間はゆるりと流れ、

「さて、と」

「キウン？」

気持ちよさそうに撫でられていたコボルトは、突然手が止まった事に疑問の声を上げる。

高明はとりあえず、ここまですればもう攻撃されることもなかりと判断。

コボルトを解放する事にしたのだ。

「さっ、お前はもう行っていいぞ。俺はお前の敵じゃないからな」
「」

柔らかな笑顔で、コボルトを見つめ、意図こそ伝わらないかもだが言葉としてコボルトに伝える高明。

コボルトはどうしたらいいのか判断に若干迷ったようではあるがここでこのまま高明と見つめあっても、得るものもないし危険も無いと判断したらしい。

ゆっくりと高明から去っていく。ほんの少し名残惜しそうにちらちらと振り返りながら。

「また逢えたら撫でさせてもらおう」

「キャンッ！」

おそらく互いに言葉の内容はすれ違っているであろうが

コボルトは高明の声に対して返事をした。

既に険が完全に取れた、コボルトの返事に高明は自然とまた笑顔になっってしまう。

「あははっ、っハァー……」

異世界の第一戦は、こうして和解が成立した。

無茶と素人知識の塊ではあったが、ちゃんと目的は達成したのだ。

しかし、その時に使った体力の代償はやはり大きい。

「疲れたあゝ…ダメだ、だりい……寝よう」

先のことを考える余裕も無く。

新しい何かが襲い来る事すら発想せず。

高明はその疲れにそのまま身を委ね、ゆっくりと意識を落とすのだった。

道先案内人、現る

「ん……いぎぎ……体痛つてえー……
ていうか昨日からどんだけ寝てんだよ俺」

ぐっすり寝てしまっただけからいくばくかの時が過ぎ
今度は錯乱もなく意識が覚める。

寝なれない野外で気にせず寝転がってしまったがために
体は間接が音を鳴らして悲鳴を上げているが。

「あー、さっきは抜けるように青空だったし、今は5時とかそこから
辺かなあ」

周りの空を見上げれば、夕日が傾きかけているかのような
若干のオレンジ色が空を染め始めている。

疲れに身を任せて、寝るといふよりは
気絶に近かった内容で意識を手放していた高明は
先程の昼っぱい時間よりは遙かに時が過ぎたこの夕暮れに入る時間
に目を覚ます。

そして高明は昨日、と言っただけでしまっているがこれはなんの事は無い。
単純に地球と呼ぶ場所とこの時間の軸がずれており
それを高明が勘違いしている形になる。

あちらが夜でもこちらまで夜、とは限らないわけである。
実際のところ、高明が地球から不意にこちらに来てしまっただけから時
間はそこまで経っていない。

(しかしあの時間から2時間から4時間位に掛けて寝たとして……)

あいつに似た生き物に遭遇しなくてよかったなあ…
寝てる時に不意打ち掛けられたら即座に死ねるし)

先程は訳もわからぬままに見知らぬコボルトに攻撃を加えられ
その疲れが過多であったがために布団で無いにも拘らずグツスリと
寝こけてしまった。

本来で考えるなら生物としてこの認識は危険すぎるのを高明は今更
理解する。

意識を手放している上に、おそらく現代の日本における
平和ボケが未だに発動しつぱなしの高明は危機が迫っても
目を覚まさないで寝続ける可能性はかなり高い。
例を挙げれば地震。これに関しても日本人は危機感が薄い。

日本人ならば気づかない人も多い震度1でも
日本以外では死人が出る事も珍しくないのだ。その位、危機感は薄
い。

肉食獣が通り掛かっていたら、それはそれは瞬時に美味しく頂かれ
てしまっていた事であろう。

「ん、まあ生きてるしいいか」

とりあえず問題を先送りにする。

その場で考えたからとすぐに適応出来るようであれば、人類もつ
と進化しているはずだと割り切った。

(でもそれ以外のほうが問題山積みだよなーこれ。

飯とかどうしたらいいんだろう。

人が住んでる所がすぐ近くにありゃいいんだけど、外で生活なんて
精々子供の頃に野外学習したぐらいしか経験無いわけだしな…

その状況ですら、自然と生活しようという感じではなく
前もって持ち込まれた食料やら道具やらで、外で調理をしたに過ぎ
ない。

圧倒的にモノが不足している現状では、この経験もあまり役には立
たないのだろう。

「まずは腹が減る前に食い物だなー……」

腹が減っては戦は出来ぬとよく言われる。

そこが一番最初に手を入れなければならぬと判断し

ガサッ

「ん？」

不意に近場から草が擦れる音がする。

ガサガサと音を認識するからにこちらに向かっていているように感じた。

(やつべー……いきなり虎とか出てきたら、無駄かもしれないけど
逃げるしかないよな)

今のところ音を発する正体がわからない高明は
何とか自分の命を貶める危機ではない事を祈った。

そしてその願いが通じたのか、表れたのは

「クウ？」

先程高明でも結構対処出来たコボルト族だった。

しかしさっきまでモフモフしまくっていた固体とは違うらしい。

そのコボルトは、耳が垂れている上に毛色もクリーム色っぽい感じが出ている。

まあそんな特徴はさておいて、やはりこちらの姿を認識した瞬間に手に持っていた武器を見せて敵対の意思を

「クン？」

「フン、フンフン、フン」

見せなかった。

「あるえ？」

武器こそ構えはしたのだが、その姿が纏う雰囲気は何故か敵意より疑問といったところ。

そしてしきりに鼻を動かして匂いを嗅いでいた。

高明も先程敵対された記憶にすぐ行き着いたため腰を浮かし（逃げる準備をし）ていたのだが

そんな可愛い行動をされては無闇に動くわけにもいかない。

「フンフン、フン、フン」

「え……ええー……？」

鼻を動かしながらコボルトは高明に近づいていく。
無論いきなり飛びつく等の警戒心ゼロな行動こそ無いが
その姿の可愛さにやや見惚れて、そのコボルトが足元に来ても高明
は何も出来ずにいた。

「フキュー……？」

「いや、あの。えっと。」

そんな首傾げられてもさっぱりなんですけど」

コボルトは高明を見上げ、鼻で匂いを嗅ぐのこそやめたが
今度はつぶらな瞳で高明の顔を見射抜く。
犬好きなら間違いなく鼻血モノの凶悪な武器だった。

（しかしなんで匂い嗅いでたんだ？匂いって、匂い　　ああ、そ
ういうことか）

高明はそのコボルトの行動を考え、そして原因を理解した。
そう、高明の体や服から匂いがしていたのだ。
そんなに日が経っていない上に洗濯したわけでもない。匂いがする
のは当然である。

先程思う存分モフったあのコボルトの匂いが。

（おそらくこの垂れ耳のコボルトは

さっきのコボルトと同じ群れ？か家族とかそんな感じなんだな）
知らないコボルトの匂いならそのまま構えていたはずであると、高
明はそんな結論を出した。

そしてそれは間違っていた。いなかっただ。

垂れコボルト側からすれば、「見た事がある生物」っぽい生き物がおり

少なくともそれと仲がよくはない。

その生物から嗅ぎ慣れた匂いがしては気になるのも仕方がないというものだ。

しかもその生き物からは敵意が感じられない。

安心は出来ないながら近づいてみたのだ。

(アー……どうしましょこれ)

とりあえずコミュニケーションか?と思いつかべた。

先程のようにモフってもよかったのではあるが

考えもあって、ひとまず違う形で接してみる事にした。

高明は腰をスツと降ろし、視線をコボルトと同じところまで持っていく。

「えーと……こ、こんにちわ?」

「ク、クウ?」

「ああ、やっぱり喋れないのね……」

うん、希望持ってたわけじゃないしそこはいいか」

「キユ、キユウ。キユウ」

高明はスツと手を出し頭の上へ持っていくと

一瞬垂れコボルトはびっくりとしたがそのまま身を委ねる。

頭を撫でられつつ、首を傾げる垂れコボルト。

先程のコボルトとは違い、高明に敵意が全く無い事は早々と認知し

たようだ。

「しっかしいよいよ持ってしてどうしましょ、これ」
(村とかあつたら案内してもらいたかつたんだが)

目線から腰を上げながら、そんな風に高明は考えていたが
やはりそこまで甘くはなかった。目の前に居る存在は人間とは違う。

身振り手振りをしても種族的に意味が全く違い
伝えたい内容が伝わらない事を、高明は恐れた。
その身振り手振りすら敵対行動と思われるでは
すったもんだな状況がまた始まってしまふのだ。

「。。。」

くいつくいつ。

「ん？」

垂れコボルトが、高明のズボンのふくらはぎあたりをクイクイ引っ張った。

そして同時に、つぶらな瞳で高明の顔を見上げている。

(おおぅ……ちょっとなんだこの大量殺戮兵器は。俺が死んでしま
うぞ)

高明はそのコボルトの行動に心の中で悶え苦しんでいた。
そしてコボルトはズボンを引っ張りながら、歩こうとした。

「……え？付いて来いって言ってるの？」
「キヤウ。」

言葉は伝わっていないなさそうだが、その行動からして高明をどこかに連れて行きたい、という感じがしたのはさすがに理解出来る。

（まさかホントに人がいる村に…とかは流石に無いよなあ
となるとこの子は俺をどこに連れて行くこうとしてんだろ？）

コボルトという種族が、先程のコボルトとあわせて言葉の意味や、高明のやりたい事をすべて理解しているわけでは無いというのはわかる。
つまりは村か何かがあったとしても、そこに連れて行くこうとしているわけではないと判断した。

かといってコボルトっぽい生物たちを見る限り高明のような敵対行動の無い生物を
『敵意の無いまま』群れに連れて行き、騙して取って喰らおうという程、知能は高く感じられない。

（んーでもこのままここに居た所で何も無いだろうしな、うん。

まあ様子から見て命の危険もなさそうだし別にいいっしょこれは。

浅く考えているのか深く考えているのかわからない答えを出し、高明は納得した。

自分が取り得る手段として、何かを得るにベストと思う判断は逃げ出す事ではなく付いて行く事だと、そう判断した。

道無き道を高明と垂れコボルトは共に歩いていく。
途中、ズボンをそのまま引つ張りながらでは歩きづらいと思ったのか
コボルトは高明のズボンから手を放して、そのまま普通に先導して
いる。

付いてきているかどうかもたまたまに振り返って確認していた。

その度に、適度に手をふりふりして笑顔で返すと
キョーンツと小さく鳴いて、また前進を始める。

歩幅も結構違うために高明は必要以上にのんびりと歩いているわけ
で、その進行速度はそこそこ遅い。

しかしそのゆっくりとした歩幅のおかげで周りをじっくりと確認しな
がらついていけるので

この状況に少し感謝していた。

(ふーん……木の实、か。食えるかな、あれ)

歩いている途中途中の木々の中に、色とりどりの果実がなっている
木を確認し

木に登るか長い棒さえ見つければひとまずの飢えを凌げそうだ、と
見上げながら、高明は当たりをつけていく。

まあ実はこの考え、とても危険だったりするのだが。

自分の常識と全く違う場所の木の实、毒物が入っていない可能性は
否定しきれない。

と、そんな気楽な事を考えながら歩いていると川も見えてきた。

「おっ」
「クウン？」

思わず声を上げてしまうと、前を歩いている垂れコボルトも振り向いた。

(そーいやあれから何も口に入れてないしな、ちょっと寄らせて貰って水でも飲むか)

「すまない、ちょっと水を飲み川に寄らせてもらってもいいかい？」

「……？　？　？」

言葉ではやはり伝わらない、と。

とりあえずコボルトに、それっぽいジェスチャーをした後
高明は川に歩いて行く。

コボルトも川のほうに高明が歩いていったがために、なんとなく付いていく。

「うはー、綺麗だー」

少し歩いて川に辿りつき、感慨深く高明は言う。

日頃からコンクリートジャングル代表格のところであんなに育っていたためこういうところに来るのは夢見ていた事もある。

川の様子は非常に落ち着いており、他に獣やコボルト的なものは一切いなかった。

川自体も、透明度が日本の河川とは比べ物にならないほど透き通っており

それだけでも水がおいしそうだ、と高明が錯覚してしまう程である。

「おー、魚もちゃんというねえ、こんだけ綺麗なら当たり前か」

その中を小型の魚やら中型の魚と、色合いこそ地味ながらゆらゆらと泳いでいた。

高明が徐々に近づいても警戒心はあまりないようである。

さすがに手を入れてみると、ちゃぶつと川の真ん中のほうへ行ってしまうが。

こうして食べ物候補No.2、おさかなさんを記憶したのだった。

「あはは、いいなあ〜こういう大自然。食べ物もつまそうだし」

そして目的だった水をひとすくいして、ゴクツと水を飲む。

隣をちらつと見てみると、垂れコボルトもついでに飲んでいるようだ。

その仕草も顔を近づけて舌を使いぺちよぺちよと飲んでおりこれまた犬チックでなんとも可愛い。

そして水は

「やっぱりうめえー！ー！！」

叫んでしまった。

晴れ晴れとした笑顔で。

そしてハツとして横を見た。

垂れコボルトが、高明の声に驚いたのか
若干プルプルしながら怯えていた。

「あ……あーごめん、ごめんなー、ちょっと水が美味しくてさあ」
「キユ、キユーン……」

顔の高さをコボルトの位置まで持って行き
両手を使って頭を撫でたり頬を撫でたりする。

「キユ、クウン」
「うん、ごめんな、驚かせちゃったね」

先程から高明に敵意がない事だけは理解しているようなので、逃げ
たりする事こそなかったが
さっきの状態はさすがに可哀想だった。言葉が伝わっていなくとも、
誠意を持って謝り続けた。

「よっし、水分の補給もしっかりと出来た。
待たせてごめんな？そろそろ行こうか」
「キャン。」

言葉がわかったかのように、コボルトは再び先程の川が見えた位置
のほうまで歩みを進める。
高明もその後ろを、ゆったりのんびりと付いていき、再び先程と同
じ状態に戻った。

(ま、多分雰囲気的なものでわかってもらえたんだろうな。
言葉を理解したってのはさすがに早すぎるし)

実際、雰囲気だけでも高明が何を伝えたいのかしつかり読めている
この垂れコボルトもすごいのだが
どうせならそのうち言葉伝わるようになんないかなあ、と
ちよつと樂觀的過ぎる望みを考えながら、垂れコボルトの後ろを付
いていく高明だった。

道先案内人、現る（後書き）

サーナイト登場させれないかな、無理だけど

わんこ達と餌予定の現代人（前書き）

実は俺、猫のほぅが好きです。

わんこ達と餌予定の現代人

垂れコボルトに付き合ひ、歩き続ける事20分程度。
未だに歩みを止める気配は見当たらない。

「 なあ…これいつまで歩くん？」
「キヤウ？キユン。」

垂れコボルトは、呼びかけられたので振り向きこそしたものの
もはや意味が互いにわかってないのと言わずもかな、である。

実際のところ、まだこの世界に来て日本の常識が抜け切っていない
高明は
歩き続けて足も少し張り始め、若干疲れ始めていた。

しかしこれは、高明に体力がないわけではない。
ただ単純に歩行の状況に慣れていないのだ。

- 1 . コボルトの歩行速度に併せている。超絶スローペース
- 2 . 森の中。
- 3 . 基本的に最近は学校にも自転車通学

完全にへばらないのは体育7の威光のおかげであろうか。
それでもきついと思いはじめているのは間違いない。

（まさか4時間とか歩くんじゃないかなろうな……）

もつ日もとつぷりと暮れてきてんじゃないよ……）

そんな風に考えを悪い方向に考え始めて3分ちよつとしたところ

「 ……おつ。森が開いたところに……つて。」

「ワフーン！」

その開けたところで垂れコボルトが可愛い声を上げた。

そこにはさまざまな顔や耳、ついでに言えば色とりどりの

そんでもって一部、珍妙な色彩をしたコボルト達が居た。

垂れコボルトの声を聞き顔をくるりとこちらに向け

「ああ、うんやっぱそつすよね。正直もう慣れました」

高明の存在に気付いた途端に、全員警戒心バリバリでこちらに対応を始めた。

あるコボルトは武器をいつでも振れるように構え

別のコボルトはちよいと小さいコボルトを抱き

高明から離れようとしている感じがする。親子であろうか？

コボルト達は呼びかけた垂れコボルトと一緒に居る事を

高明の評価に繋げてはいないようである。

しかし全員警戒こそしているものの、どう動けばいいのかまではわからないらしい。

その原因は、やはり垂れコボルト。

「見た事がある」っぽい生き物と一緒に居て

何事も無く帰ってきている彼の存在が、コボルト達に疑念符を感じさせている。

そして高明も薄々感じ始めていたが、前のコボルト、垂れコボルト、コボルト達。

全てが高明に一度は向けた敵意。

ぱっと見た感じ高明自体からは殺気も一切ないにも関わらずである。

それはつまり

(少なくともこいつらが知る範囲に人間が居る……のか!?)

そう考えてみると、全員から警戒されるのもうなずけるのだ。

もし友好的であるなら武器まで構えはしないだろう。

だからこそ考えられる。コボルトは人間か

もしくはそれに準じた生物とうまく行っていない。

戦争状態なのか、一方的に狩られる存在として虐げられているのか

……

そこまではわからないが、高明はそんな状態だと考えた。

「ワウーン!!ワン!!クキュウーン!!」

垂れコボルトが、高明の前に立ち庇う様に立って何かを喋っている。おそらくは説得してくれているのだろう。腕をばたばた動かしながら必死に群れに向けて鳴いている。しかしその説得も力及ばず、群れの中地点に居たコボルトがゆっくりと高明に歩いて来て

「　　って、あれ？お前……まさかさっき昼ぐらいに居たやつか？」

「キャウン。」

「フンフン、フン、フンフン、キャン！！」

歩み寄ってきたコボルトはおそらく

先程高明が命懸け（？）で精一杯モフった固体っぽい。

毛色があの際に見たコボルトと全て同じだった。

そして近寄ってきたコボルトの匂いを垂れコボルトはしきりに嗅ぎ

『自分の考えた事は正しかった！！』とでも主張するかのよう

に一声鳴き、手を上げた。実に可愛らしい仕草である。

「よっす、ついさっきだったけど元気してたかー？」

なでなで。

「キュ、キュン。」

他のコボルトまで懐柔した成果なのか、警戒心は完全に解いているようであり

高明がすつと差し出した手にも過剰に反応しない最初のコボルト。そのまま頭を撫でてみたところ、そこそこ気持ちよさそうである。

「クウン……?」

「キヤウン?」

「? ? ? ?」

「キユ」。

2匹が警戒心ゼロで、高明に接しているために

コボルトの群れなのであるうか、全員が全員武器の構えや逃げる準備をやめる。

そしておそろおそろ高明に近寄ってきた。

ついでに言うなら子供であろう、ひときわ小さいコボルト達は警戒心もほとんどなく近寄ってきている。

その様子を見た高明は、下手に高い視点から見下ろさないほうが良いかнаと思

「よっこいしよっ」と

あまり急な動きを混ぜず、自然と腰を下ろしてみた。

背の高さも、コボルト達の怖い部類から許容範囲内に近寄ったのが子供コボルト達は高明にペタペタと触れ始める。

なんと背中の部分から上ろうとしているワンパク小僧まで1匹居るようだ。

「あ、ははは……。珍獣扱いだなーこれ」

若干気が抜け、笑顔になりつつなすがままの高明。

しかし動物好きな手前結構うれしいものがある。

登った1匹が肩に立ち、高明の頭を抱きかかえて

バランスを一生懸命取っているところあたりで
周りに居たコボルト達も全員高明に近寄ってきた。

「えーと……こ、こんにちわ〜」

「キャ、ウン。」

「キュン。」

「ワン。」

言葉は伝わらないながらも、何気にコミュニケーションを取れているあたり

高明自身、未知への遭遇に対して対応力がかなり高いようである。

「しかし、垂れ耳ちゃんよ。

なんで俺をここに連れてきたんだ？

俺お客さんでいいんかい？」

「クキュ？キューン。」

手近な位置に居た子供コボルトの喉元をくすぐりながら
さつきからずつと近くに居る垂れコボルトに高明は聞いてみる。
まあ答えは先程から相変わらずの鳴き声なのだが。

「んー、なんじゃろねえこれ。一応今は険悪な雰囲気じゃないけど

……

まあそのまま居てもよさそうならお邪魔しとくか」

食事に虫とか出てきたらちよつと嫌だな…とは思ったが。
などと思案している。

「ウォン！ウォンツ！！」

突如コボルトの中でも聴いた事がない声が聞こえてきた。
声自体が結構低いという、さっきまで聞いてた可愛さの残る声から
すると

結構威厳がある声が場に響いた。

ザツ！！

周りに居たコボルト達が全員そちらのほうに視線を移す。
子供コボルト達だけは、声のほうに顔を向けながらも
意識は高明にしかいてないようだが。
事実、喉元をくすぐっていた子供は、顔を向けたはいいのだが
すぐに目を瞑り気持ちよさそうにくすぐられ続けている。

「んー？……群れのボスか？」

こちらに、ちよつと黒っぽい顔をした一回り大きいコボルトがこちらに歩いてくる。

後ろには取り巻きなのか精鋭なのか、3匹ほど普通のコボルトが見える。

そしてボスっぽいコボルトがこちらに向かってくるたび
周りに居たコボルト達は道を譲るために垣根を分けている。
その分かれた道の中を悠然と歩いて来て高明の前に辿り着く。

高明はとりあえず目の前の……ドーベルマンぽい顔をしたコボルトをボスと過程した。どうすりゃいいかなあと思っていたところに、垂れコボルトがボスの横に出て

「キューン。ワウン。わうー」

なにやら説明(?)している様である。

言葉こそわからないが雰囲気だけはある程度やわらかいようだ。

ひとまずは、こちらに向かってきた事だしと思い言葉は伝わらないのだろうが、高明はとりあえず礼儀として挨拶をする。

「こ、こんにちわ」

「なんデ、エルふ、イる？」

「は!?!え、ちょ、えええー!?!」

突然、日本語と思われる単語が聴こえた。

発音元は間違いなく、目の前のドーベルコボルトだろう。

今まで全てのコボルトが意思疎通不可能だった状況から

いきなりこれでは、高明が驚くのも当然であろう。

事実他のコボルトまで、高明のびっくり具合にびっくりしてちょつと後ずさっている。

しかも単語がたったの3語ながらその中身には何気に驚愕の事実が混じっていた。

「え、ええちよつ、喋れ、喋れんの?!俺の言葉わかるの!?!」

つかエルフってあれか?!金髪とかのか!?!」

「　　ツッグアオウツツ!!!」

「ヒヤンッ」

「キヤインッ」

「うひよあ?!……急に吼えんなつ!!!」

「おまエ　ことば　はヤスギル。おれ　えるフ　ことバ　たくさん、
わ力らん」

いきなり吼えられたかと思えば、その後にとどたどしい発言。

ますます持つて混乱しそうな高明だが、ひとまず落ち着かねばなら
んと

無理やり額に手を置き、独自の念仏を唱え始める。

ちなみに真ん中の発言は、頭に乗った子供コボルトのものと
ボスコボルトの横に居た垂れコボルトである。

ボスの一吼えでびっくりして、子供は高明の頭から背中に掛けて転
げ落ち

キューンキューンと切ない声で鳴いている。

垂れコボルトはとりあえずボスから離れて転げ落ちた子供のほうに
寄って

頭をなでなでしてあげている。

「こたエろ　エるふ、ナンでイる?」

「あー……」

どうやら、このボスコボルトは高明をエルフと見なしている様だ。

しかしこの勘違いも仕方が無い。彼らの記憶の中で

ここあたりで毛皮も纏っていない上に背が高い二足歩行の種族は
彼らの中でエルフという種族しか該当しないのだ。

ひとまず高明は出来るだけ頭を冷やし
これから先の対応と回答をある程度予想する。

ちなみに高明に、予想と現実が完全に合致するようなスキルはない。

「よし、待ってくれ」

「なんだ？まつ、どうイウコとダ」

「きつと、君が俺の質問に答えたほうが、理解が早いよ。」
「ぬ？」

ボスコボルトが、高明の言わんとしている事に理解を示せず
よくわからんという感じに首を傾げた。

「とりあえず前提として……俺は、エルフってやつじゃない」

「えるフじゃない？おまえ、エルフ しか 見えナイ」

「多分だけど、そのエルフってさ。」

耳、とがってるか長いんじゃない？ほら」

「う？ほんトウだ。おまえ、ミミ、ながくないナ」

髪をどかすまでもなく露出している耳を、指でくいつと引つ張り
ボスコボルトに見せて納得させる高明。

「じゃア オマエ なんダ？」

「俺は、人間だよ」

「にんゲン て なんダ？」

「え！？人間居ないの！？」

「おれ 聞いタ コと ナイ」

人間という言葉を知らないボスコボルトの反応に
一番分かり合える同種族がこの周りに居ないと悟り

正直にびっくりしてしまう高明。

「マジかぁ…… エルフは居るのに人間居ないのかぁ」

（という事は、このコボルト達が俺に敵意を示してたつてのは
エルフに対してつて事だよな、さっきのボスの第一声もエルフだ
つたし

普通森の住民つて意味ならエルフつて仲良さそうなイメージある
んだけどな）

小説を見たり、友達がやっているゲームの設定によく質問していた
高明は

聞いた限りでは人間を嫌うような設定は数多くあるが
森の住民と敵対している関係は聴いた事はないが
現実はこのものなのだろうか、と思う程度にする。

（まあ、それはいいか。それより現状の把握と今後の事だ）

「なぁ、ちよつといいか？」

「なんだ、ミミ ながク ない ヤツ」

「……俺の名前、佐島高明な。高明つて呼んでくれ」

「なまエ？ナンダそれ。喰エるか」

「……名前の概念まで無いのかよオイ」

ここまで来るともはや現状の把握とかそういう問題ではなくなつて
くる。

質問、説明の意味すらわかってもらえていない可能性が高いわけで
こちらが質問した内容に対して本当に求めている答えが
しっかりと出てくるかどうかすら不明瞭になつてきてしまう。

「名前、つてのはな。例えば、この群れの中で

お前だけや、特定の子を呼びたい時に使う声だ」

「ウウ……………？わカラん……………」

「……………オツケー、よし、お前」

「なんダ」

「お前の名前、ポチな。決定」

もうどうしようもねえと判断してしまい、勝手に名前をつけてしまった。

あまりにもありきたりすぎる名前にしてしまったが、どうせここは日本とは違う

日本の常識の当たり前もここでは当たり前ではあるまい、とボスコボルトの名前を、何も気にせずポチと命名した。

「ポチ 喰エるか？」

「喰う事から離れる！！ポチって呼ばれたら声出せ！！」

「う……ウオン？」

どうやら何が何でも喰いたい感じである。

最終的にボスコボルトが出した声に関しても怒鳴られたから疑問系になったに過ぎない。

「ポチ。」

「ウオン」

「タマ。」

「ウオン」

「違う！！お前の名前はポチだ！！」

「ワ……………ワカラん」

「いいから！！タマ！！」

「……………」

「キューン？」

「いや垂れ耳ちゃん君じゃない!!」

「クウーン……」

「ポチ!!」

「ウ、ウオン……」

「そう、そうだ!! お前の名前はポチだから!!」

「うんよし、よしよし」

「ウオウ。」

ポチと呼んだら正しく鳴いたので、喉元をくすぐってやる。

やはり見た目通り犬と同じで気持ち良いのか

ポチも気持ち良さそうにくすぐられている。

「いいか、ポチって呼ばれたらな

ちゃんと声を出して主張するんだ。

それが、名前 ってことだ。

ポチ以外の呼び声なら別のやつの事だからな」

「よク わからん」

「まゝそんなに硬く考えないでくれ。

お前はポチだからな。わかったか？」

「ウオン。」

「そうだ、よしよし」

おそらくきつちり理解していないだろう、と高明は思つもちゃんと答えたご褒美として

ポスコボルト改め、ポチの頭を軽くグリグリする。

いきなりわからないものに触れてそれを完全に理解しろ、というのも無理がある。

なので徐々に慣れていってもらえばいいかな、と考えるに留めた。

なお、横目でなにやらうらやましそうに垂れコボルトが見ていたりする。

今そこに意識を向けても何にもならんと割り切り、高明はポチに改めて意識を集中した

「うん、よっし、ポチ」

「おれ 呼んだな？」

「そうそう、それでさあ……ポチってこの群れのリーダーなのかな？」

「リーダー？ なンダ？ 喰」

「喰えないからな。えーと……ポチは、この群れで一番偉い？」

「オれ、偉イぞ。みんな おれ しタがう」

やはり周囲に対する威厳から、ポチはこの群れにおけるリーダー格だったらしい。

言葉が片言な上に安易過ぎるものばかりなので

この時点で完全なリーダーと判断するのはやや早計なのだがそれでも高明は権限十分と判断し、次の話に移る。

「えつと、さ？ 俺、少し前にいきなりここに来たばっかださ」

「？ ？？ なんダ？ いきナリ？ タカアキ、何 言う？」

「あーまあ、とりあえず何もわからないのにここに居るって事だよ」

「なんデだ？ 歩いてきた、違ウのか」

「うん、そうそう。そんな感じ」

言葉が通じるからこそ、なんとか全てを伝えたい高明だが

詳しく話しても、原理の筋が通っていない話は理解してもらえない

ようである。

「んで、さ。全然周りの事も何もわからないんだ……」

「そうナのカ」

「うん、それでさ……」

しばらくの間、俺をこの群れに入れてはもらえないかな？」

「駄目ダ」

「即答?!」

あつかましいお願いである事なのは感じていたもの
考えるまでもなく突っぱねられるとは思っていなかった高明は若干
調子が狂ってしまう。

「な、なんで駄目なんだ!?俺が人間だからか!？」

「たかアキ、入る。俺ラ、メシなくナる。」

「あー、俺に渡す飯が無いつてこと?」

「そウダ。メシ無イ、オレラ 生きれない。」

こども、死ヌ。オレら 今もハラ 減つテる」

さつきから喰いたがりまくっていたのは現在進行形での空腹が原因
だったようだ。

(確かにまあ、コンビニなんてもんあるわけもないし

自力で狩り成功させなきゃ何も喰えないんだろうなあ、肉食だと)

「……なら、さ。俺は自分のメシを自分で採るんだったらどうなる
のかな」

「それナら いい。でも メシ、取れなクても 上げナイぞ?」

「うん、大丈夫。群れに戻るならそれでいいんだ。」

……しかし、今も腹減ってんの?」

「さいキン どうぶつ 全然 おらん。

みんな ハラ 減ってル。

さいシヨ たカアキ 喰おう 思ッた」

「キユーン……」

「……その内容自体シヨツクだけど、お前らエルフに勝てるほど強いのか？」

さっきまで俺をエルフと思ってたんだろ？」

「みんな もウ 限界近い。ダメなラ ミンな 死んだだけだ」

「……野生な部分はきっちり野生なんだな」

「クウ。」

垂れコボルトも切なそうな声をあげている。

高明は、まさに一蓮托生と感じた。ここまで実直な生き様だと素直に感心してしまう。

どうやらこの世界では（少なくともこのコボルトの群れでは）群れひとつでひとつの思案という形であり

誰が誰を出し抜いて一人生き抜くという発想がそもそも生まれないようである。

「今、飯をさ？ なんとか出来るかもしれないって言ったらみんな喜んでくれるかな？」

「ほんトつか！？ 嘘だツタラ タかあき、喰うぞー！」

「そこまでハングリー！？」

……ってその発想まで行ってんなら本気でやばいってことか」

少し首を見回して様子を見れば、確かにコボルト全員

活力に溢れているとは言えない立ち振舞いだ。

ふらついてこそいないものの、何かしらの原因で獲物が狩りきれず飢餓一歩手前まで行っている状態なのである。

「いや、ちゃんと見てみないとさすがにわからないよ。
でも何とかしてみるから」

「みんな ハラ 入ルなら 助かる。たノむ」

「ああ、任せろ!!」

とにかく急いで食べ物探さないとな。

きつとみんな俺の話わかってないだろうから、ちゃんと伝えてくれな？」

「わかッタ」

「で、その飯探しを手伝う代わりに

俺をちゃんと群れに入れてくれよ？」

「メシ うレしい。みんな ちゃんと 分かる 思う。だいジヨウ
ブだ」

そうしてポチは、周りに居る全コボルトに対して
何かを伝えるように唸るように吼えた。

鳴いているように聴こえないあたり、やはりボスの威厳なのだろう。

そしてボスの話の途中から高明に視線が集まり始め

全員、高明を見て目をキラキラさせ始めている。

この空腹の中で飯の知恵が働く高明は、救世主に近い存在なのだろう。

(……ポチは人間を知らない、って言った。

そして、エルフなんてものが居る。

だったらもうここは、少なくとも

俺が知る地球や日本じゃないんだろうな……)

コボルト達の尊敬の眼差しを受けながら、状況整理を進める高明。

さっきの会話で得られた情報は微々たる物でしかないが、状況の判断をする上では

必要最小限のものは得られている。

(こいつらを助けた後に日本に帰れる、ってんなら万々歳だ。
でもそんな都合のいいように行くわけ無い……。)
そんな状態なのに、拠点も仲間も無いのは不味すぎる……)

実際どんな生き物が居るのかすら全くわからない状況だ。
高明と同じ状況で、この短時間で森の住人の後ろ盾を得る状況まで
果たして元の世界の何人が辿り付く事が出来るだろうか。

(これはもう、帰る方法は一切無いって考えて進めなきゃ駄目だ。
そうじゃなきゃ生き死にの欠片もわからん俺じゃ確実に数日後に
はあの世行きだ。

まずは生活を出来る形だけでも作らないと……)

この時点で、高明は自分が元居た場所に「帰る」可能性をきっぱり
と捨てた。

完全な命の危機こそないものの、暴力が平然と振るわれたその事実
と現実こそ

甘い考えを捨てて、乗り切らなければならぬこの世界の根本の法
則と理解する。

どうせ帰ってもテスト勉強だ、と若干思ったりもしたが。

「たカアキ チャント 伝えタぞ」

「うん、わかった！それじゃ早速」

垂れコボルトが高明の怒りのオーラに対し
わずかにしか怯まず、止めようと足元で裾を引っ張る中
高明のアイアンクローはポチを吊り上げそのままに
怒りのパウワアで高明の腕の力は無駄に限界を超越し
掴んだ右手はポチの体を浮かした上で、さらにポチの頭を締め上げ
た。

「勝手に約束を改ざんするやつあお仕置きだあああああー！
！！！」

「キャウー————ンツッ！！！！」

「わふう————ん！！！！」

こうして日の暮れ頃2匹のコボルトの、2種の悲鳴が森を貫いた。

副次効果として、この行為は

『俺らのボスを片手で吊り上げる強いやつ』
とコボルト達に認識され、ちゃんと言う事を聴いてもらえるように
なった様である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9046x/>

人外王国建国記 ~a Monster Kingdom~

2011年10月25日02時04分発行